

東京の夜間定時制高校の存続を求める緊急アピール

「学校不信から高校に行かずに働きたいと言っていた息子は働きながら学べる夜間定時制に進学し、今では高校の教師をしています。夜間定時制をなくさないでほしい」。4月5日の7校の定時制の存続を求める集会にさまざまな立場の人がかけつけ、次々と夜間定時制の魅力を語りました。

こうした声に背を向け続けているのが東京都教育委員会（都教委）です。昨年10月、さらに夜間定時制の募集停止（廃校）を拡大する計画を決めました。その理由として夜間定時制は小規模だから教育効果が十分に得られないと説明したことに怒りの声が広がっています。小規模だからこそ、教師と生徒のアットホームな関係のなかで、授業や部活動、学校行事などに取り組むことができるのではないのでしょうか。「誰一人取り残さず」（東京都教育施策大綱）が東京の目指す教育であるなら、夜間定時制高校を廃校にするのではなく、よりいっそう充実させるべきです。

4校の夜間定時制高校の募集停止が発表されてから10年、毎年署名を集めて声をあげ、立川高校と小山台高校の2校の夜間定時制を存続させてきましたが、今春、立川高校定時制は募集停止になりました。都教委が代替校の役割をはたすとして立川市に新設した昼夜間の定時制であるチャレンジスクールに受験者が集中し、250人近い生徒が不合格になりました。来春には、このままでは小山台高校（品川区）、桜町高校（世田谷区）、大山高校（板橋区）、北豊島工科高校（板橋区）、蔵前工科高校（台東区）、葛飾商業高校（葛飾区）の6校の夜間定時制高校の生徒募集が停止になります。

都教委は募集停止になっても遠くの他の定時制や全日制の高校に通えばいいという無責任な対応を考えています。生徒のことを考えない無謀な廃校計画です。しかも、該当校の在校生や卒業生、地域の住民などへの説明は何もなされていません。

都立夜間定時制高校を舞台にしたNHK連続ドラマ「宙(そら)わたる教室」では、さまざまな理由で夜間定時制にたどり着いた生徒たちが「あきらめたものを取り戻す場所」が描かれ、共感を呼びました。夜の教室で学びと居場所を必要とする生徒がいる限り、夜間定時制高校をつぶしてはなりません。

2025年6月9日

石川文洋（写真家・都立両国高校定時制卒業生）

梅原利夫（和光大学名誉教授）

太田直子（映画「月あかりの下で・ある定時制高校の記憶」監督）

太田政男（大東文化大学元学長）

児美川孝一郎（法政大学教授）

澤井留里（墨田区立文花中学校夜間学級元教員）

進藤 兵（都留文科大学教授）

多賀哲弥（都立大崎高校定時制元教員）

本田由紀（東京大学教授）

矢澤宏之（エルムアカデミー代表）

山本由美（和光大学名誉教授）

都庁第一庁舎の都庁記者クラブにて、「東京の夜間定時制高校の存続を求める緊急アピール」発表の記者会見が行われました。7社が参加しました。緊急アピール(全文を添付しました)を呼びかけた11人のうち6人が出席し、発言しました。

(梅原利夫・和光大学名誉教授)

新制高校が出発して80年近くになる。戦後教育のなかで定時制高校が果たしてきた役割は大きい。今や多様な教育機会を保障することは、都教委も文科省も国民のあいだにも大事な考え方として浸透している。多様性を保障していくのが子どもの学習権を保障するという一点からみても、今回の都教委のやり方は到底理解できない。定時制を廃止することは世間の常識からみても逆行しているのではないか。

(太田直子・映画監督)

立川高校全日制を卒業したが、担任の先生が熱心に定時制で教えていた。2010年に埼玉の夜間定時制を舞台にした「月あかりの下で・ある定時制高校の記憶」という映画を制作した。そのとき4年間クラスに入り定時制を見てきたが、先生たちは学校が居場所であり、学びの場であることを大切にしていた。その頃より今のほうが経済的に厳しくなり、不登校が増えてきた。多様な生徒を受け入れる選択肢の一つである夜間定時制をなぜつづすのか。

(矢澤宏之・エルムアカデミー代表)

品川にある学習塾に通う生徒は毎年、小山台など定時制に毎年進学している。中学入学後いじめにあって不登校になった生徒が小山台定時制の存在を知り、そこで友達もでき勉強にも積極的に取り組み、大学に進学していった。「小山台がなければ今の自分はない。ほんとに定時制は大切だ」と言っている。小山台高校は地元では名門で、誰もが知っている。駅のすぐそばにあり、夜でも安心して通える定時制を残してほしい。

(山本由美・和光大学名誉教授)

東京都の学校廃校数は北海道に次いで多い。東京では産業構造の転換に応じて高校の統廃合・再編がなされてきた。定時制の統廃合が進められた2004年には定時制の生徒が国連子どもの権利委員会に行ってアピールし、子どもの権利委員会は東京都に定時制の存続を求める勧告を出した。にもかかわらず、その後も定時制の廃校を進めている。多様な生徒を受け入れて次のチャンスを与えてきた定時制高校を守ってほしい。公教育を守るという意味でも定時制の存続を強く願っている。

(太田政男・大東文化大学元学長)

定時制は現在も家庭の状況や貧困から、あるいは管理や競争教育のなかで全日制高校に行けなかった生徒の重要な学びの場となっている。外国籍の市民の子どもたちも多く学んでいる。日本の現在の社会の矛盾や教育制度の問題が定時制高校を必要としている。定時制は多様な生徒と一緒に学び成長していく共同の学校である。そのことが大阪の定時制の実話をもとにしたNHKドラマ「宙わたる教室」によく描かれている。共同の学校として定時制高校を大事にしていきたい。

(多賀哲弥・都立高校定時制元教員)

35年間定時制高校の教員だった。都教委は「チャレンジサポートプラン」のなかで、少人数では教育効果がないなどと言っているが、少人数だからこそ救われたという生徒は多い。少人数で困ったと声をあげる現場の教員はだれもない。都教委が机上で考えているだけ。不登校になった生徒は大集団が苦手であり、小さい集団だからこそ救われる。先生と生徒がお互い全員が名前を知っている環境のなかで授業も学校生活が送れる。「小さいことはいいことだ」ということをもっと見てほしいし、そこに光をあててほしい。

発言の後、質疑応答が続き、「署名を街頭で集めているときの反応は」「今、緊急アピールを出すのはなぜか」「チャレンジスクールとの違いは何か」「この問題を都民にどう訴えていくのか」などなど。記者会見が終わっても発言者への聞き取りが続き続きました。

記者会見の後、都庁第二庁舎の会議室に移動し、第一次署名提出(13, 192筆)と要請を行いました。都教委側はこの問題を担当する改革推進担当3人と広報統計課2人の5人が対応しました。立川高校定時制同窓会、小山台の会、北豊島工科の元教員、葛飾の会、そしてアピール呼びかけ人の一人梅原利夫さんから、存続を求める力強い発言が続き続きました。文書による質問も提出し、都教委は文書で回答するとしましたが、回答時期を早めること、その回答に再質問できる場を設定すること、おざなりな回答をしないことなどを強く要望しました。

私たちは10年間、夜間定時制の存続運動を続けてきました。毎年署名を集め提出し、多くの疑問を都教委に提出してきました。都教委は私たちの疑問を聞き置くだけで、きちんとした説明をしていません。今春、立川高校定時制は募集停止となり、来春には小山台、桜町、大山、北豊島工科、蔵前工科、葛飾商業の6校の定時制を募集停止にしようとしています。「少人数だから教育効果がない」というのはあまりにも理不尽です。都教委の暴挙を許してはなりません。